

## 白秋童謡の分析 (1)

笹本正樹

まえがき

大正芸術自由教育のなかで<sup>1)</sup>、北原白秋は主要な位置を占めていた。童謡の分野は北原白秋、野口雨情、西条八十の三人によって、黄金時代を開いたのである。そのなかでも、とりわけ北原白秋の業績は大きい。それは作曲家の山田耕筰との共同の作品が、その当時だけでなく、後世に大きく影響したからであろう。すなわち、ふたりの天才的コンビによって、作詞、作曲がこの上ない芸術性を生むことになったからである。

こうした児童のための歌が、きわめてすぐれた芸術作品となったことは世界でも稀であり、日本の文化の深さを示すものである、と言えよう。

ここでは北原白秋の童謡、約200の作品のなかから、とくに母に関するものを取り挙げてみることにする。白秋童謡は父に関するものも少々あるが、それは次回にまわしたい。

今回は、子供（嬰兒、幼児、児童）と母との結びつきがどのように歌われているかに、焦点をおいてみた。そして、その大約を、三つに分類してみた。すなわち、抱擁の母性、同行の母性、回想の母性、とした。こうした観点から、それぞれの童謡について、考察をすすめていきたいと思う。

人は生まれて、母の抱擁によって母乳を与えられて成長する。抱かれ、眠り、愛撫されたのち、少し大きくなり、立てるようになると、母のまわりを歩き、あとを追って歩き、あるいはまわりつく、すなわち、母と子は同行である。そして、さらに大きくなると、母と離れていく。そこに母性を恋うる心が生ずる。すなわち、回想の母性である。こうしたことを基準にして、嬰兒、幼児、児童に生長して行く。北原白秋の童謡では、それらがどのように歌われているのであろうか。

### 1 抱擁の母性愛

嬰兒は母に抱擁され、愛撫を受け、母乳をもらって、安心して眠る。これの繰り返しである。ここに母性に対する絶対的な信頼感が生まれる。これの欠除した人間は、人間性において何らかの欠けるものを持って、生長していくことになるであろう。

嬰兒の安らかな眠り，その幸福感を，詩人北原白秋がみごとに表現し，さらにそれによい曲が加わって，いやが上にもわれわれの脳裏に深く刻みつけられたのは「揺籃のうた」である。

白秋は三番目の妻，佐藤菊子との間に，長男，隆太郎，長女，篁子をえた。そのことによって，あとからあとから溢れるように，童謡が生まれてくるのである。この作品は大正11年の作であるから，隆太郎の誕生後の嬰兒を眠らせる歌であろう<sup>2)</sup>。そして，この曲を聴くことによって，私たち大人でさえも幸福な眠りの世界に陥ってゆく気分になるのである。

ゆかやぶの子。ふもつてのぐつ。聞きお神童。ア。い。こ。人。三。の。十。八。歳。西。新。歌。口。習。 北原白秋の揺籃のうた。同共のう。新。山。の。童。曲。が。け。う。 大。正。十。一。年。の。北。原。白。秋。の。揺。籃。の。う。た。

揺籃のうた

揺籃のうたを，

カナリヤが歌う，よ。

ねんねこ，ねんねこ，

ねんねこ，よ。

揺籃のうえに，

枇杷の実が揺れる，よ。

ねんねこ，ねんねこ，

ねんねこ，よ。

揺籃のつなを，

木ねずみが揺する，よ。

ねんねこ，ねんねこ，

ねんねこ，よ。

揺籃のゆめに，

黄色い月がかかる，よ。

ねんねこ，ねんねこ，

ねんねこ，よ<sup>3)</sup>。

ここではカナリヤ、枇杷，黄色い月と，どれも黄色である。木ねずみは灰色であろうか。そうしたほのかな色あいである。白秋の詩歌は若いときは原色の強烈なものであったが，ここではそうしたものはでていない。眠くなるようにするための歌であるからか，こうした暖色系が多いのである。

こ Yurikago no Uta o,

。 Kanariya ga utau yo,

。 Nenneko nenneko,

Nenneko yo.

。 a = 7 e = 6 i = 2 o = 8 u = 2

母音の上では，o = 8 a = 7 e = 6，の音が多くでていて，音韻が明瞭である。音節の上では，

5 3

5 3 1

4 4

。 4 1

であって，単純なものである。5と4で調子をとっていることがわかる。「ねんねこ」は三回繰り返しているのです。眠くなるような気分になる。

南の風の

南の風の吹くころは，

朱<sup>ぎほん</sup>樂の花がにおいます。

朱樂の花の咲く夜さは，

空には白い天の川。

三つ星，四つ星，七つ星，

数えていたれば，つい，眠むて。

ついつい，とろりとねんねした。

そのまま朝までねんねした。  
南の風の吹くころは、  
朱樂の花がにおいます<sup>4)</sup>。

さきほどの「揺籃のうた」のリズムも、母に抱かれて揺られているリズムであるが、この「南の風の」も、赤ん坊が一人で寝ているのではなくて、母に抱かれている感じがする。「三つ星、四つ星、七つ星」は自分で数えているというよりは、母親に数えてもらっているであろう。

「朱樂の花がにおう」というところで南国情緒がいっぱいである。もちろん、その前に「南の風が吹く」とあるが、花がよい匂いのすることで、母性愛を暗示しているようである。

Minami no Kaze no fukukoro wa

Zabon no Hana ga nioimasu.

a=6 o=7 i=4 u=3 e=1

「空には白い天の川」の表現によって、その白さを背景に、ザボンの朱色が花開いているイメージを、私たちは思い浮かべることができる。

一つ、二つがなくて、「三つ星」から始まっているのは、この子が三歳ではなからうか、と考えられもする。「とろりとねんねした」とか、「朝までねんねした」という表現で、この子がまだ幼いことがわかる。あるいは母に抱かれているか、添寝されているかのいずれかであろう。

こぬか雨

こんこんこさめ小雨の

ねこやなぎ、

こぬかの小雨がかかります。

こんこん小雨の

こぬか雨、

こんこんこまかにおしめりか。



こんこん小雨の  
ねこやなぎ、  
ねんねの寝た間におしめりか。

こんこん小雨の

こぬか雨、  
あした すみれ  
明日は 堇も咲いてましょ。

こんこん小雨の

ねこやなぎ、  
ねんねもすやすやすみます<sup>5)</sup>。

「ねんね」というところをみると、添寝のようである。子供はやはり一歳から三歳ぐらいまでであろうか。「小雨」というところが小さい子を示していると同時に、この詩のバック・グラウンド・ミュージックでもある。

「こんこん小雨の」でK音が三つ、リズムをなしている。また「こんこん小雨のこぬか雨」のところでは、K音が四つにもなっている。二行目の「ねこやなぎ」のN音は、その前の一行目のN音と対比的にリズムをつけている。

イメージとしては、ねこやなぎにしとしと小雨がかかっていること、それが主体である。そして、明日は「堇」も咲くことであろうとする。そのふたつのものにしか、イメージは湧いてはこない。ただ、あとは小雨のふるばかりである。色彩的には、銀灰色のねこやなぎと、すみれの紫を暗示しているといえよう。この子守唄も原色を抑えた色彩表現となっているのである。

ねんねのお国

ねんねのお唄はよいお唄、

ねんねのお唄をきいてれば、

とんとろお月さまかすみませ。

ねんねのお国へまいります。

ねんねのお国は水祭、  
花から花へとおいませ。  
鶯がちょうも浮きます、くだります。  
お囃子はやしなんどもきこえます。

ねんねの祭へゆく人は、  
ちらちら、丘からつづきます。  
台傘だいがさ、立傘たてがさ、花の山車だし、  
神輿みこしのお舟も通ります。

ねんねの祭で見る人は、  
何だかうれしい人ばかり、  
いつだか、何処でか、どうしてか、  
何だか見たよな人ばかり。

ねんねのお母さまよいお方、  
いつでもかわいとお抱きなる、  
お手々を曳かれて、祭見て、  
はぐれて泣いてりゃ目がさめた<sup>9)</sup>。

よく眠る子を「ねんね」というのであろう。母親は子供によく眠ってもらいたい。寝る子は育つと言うし、泣いてばかりいられては、全く疲れてしまうことだろう。また、病気かと心配にもなってくる。

ここでは「ねんねのお国」という表現がでている。これは現実界よりも他界に意識がいつていることである。実際に、別の国に渡っていくわけではない。想像の世界に遊ぶことができる、ということにほかならない。

しかし、白秋はその国では人々が水祭りをしてしているという。水の中に花が咲いているようである。それは蓮の花だとしたら、極楽浄土のことなのかも知れない。音楽もきこえてきて、白鳥ならぬ「鶯鳥」も浮んで、流れてゆくのである。

それから人間も歩いて行く、水の中を神輿もいき、それを見にいく人たちも台傘や立傘

である。花の山車もでている。水天宮の祭であろうか。

母に抱かれたり、手を曳かれたりして、祭をみている。その他、となりの人や友だちなど、見たような人ばかりいる、としている。

なんとも、幸福に眠っている子のイメージがつよい。最後ははぐれて、泣いて目をさましてはいるが、よい唄もひびいて、お月さまのかすんでいるよい国である。

白秋は祭の時は、腹ちがいの姉と山車の先頭を着飾って、歩いたりしたようである。それは歩けるようになってからである。それ以前の歩けない嬰兒の時は、母親に抱かれて祭を見たことであろう。祭は水郷柳川のものであるから、神輿の舟もあったと、考えられる。ねんねのお国は、彼の育ったふるさとのことでもあろうか。幸福な幼年時代であったことが、これらの童謡からわかるというものである。

## 2 同行の母性愛

愛撫や抱擁、そして揺籃の時代がすぎて、子供は立ち上がって、自己の欲求に従って歩き出すようになるが、いわば生活の出港と帰港はたえず母を母港となしているのである。

何かを試みる、好奇心をもって何かをやってみる。しかし、再びそれが終わると母のもとにやってくる。母を同心円の中心として、子供は経験的の範囲を拡げていく。

ここでは、母親と行動を共にする、あるいはしたいとする作品を挙げてみた。子供は母親がいないと不安であるし、母親はすべてのことで、自分の味方であると思っている。母親は自分の欲求を満たしてくれる存在、と思っているのである。

「愛語」「同行」という仏教上の用語があるが、まさに、これこそが母親のわが子供になすものであろう。

### 仔馬の道ぐさ

道草しずと、

草よ馳け、仔馬。

かるかや、<sup>ききょう</sup>桔梗、

すすきの原を。

とととと走れ。

お母さんの馬は、

こちら向いて待つに。

追いつけ、仔馬、

秋風吹くに。

とととと走れ<sup>7)</sup>。

調子がどのようにとられているのか、その字数をかぞえてみるに、次のようである。

4 3	(7)	起
4 3	(7)	
4 3	(7)	承
4 3	(7)	
4 3	(7)	
6 3	(9)	転
6 3	(9)	
4 3	(7)	結
4 3	(7)	
4 3	(7)	

「お母さんの馬は、こちら向いて待つのに」のところだけが、破調である。他はすべて、4 3 調でいっている。

お母さん馬が、仔馬のくるのを待っている。

何かそのしぐさがわかるような気がする。季節は秋である、風が吹いて、すすきが揺れている。それだけでも仔馬にとっては、大変なことであろう。作者である北原白秋は仔馬を一生懸命はげましている「とととと走れ」と。しかし、仔馬はあいかわらず、少し道草をしているらしい。

月夜の庭

月夜

おお、明るいな、<sup>ほう</sup>朴の葉に  
月の朴の葉うつってる。

みんなしずかだ、<sup>あし</sup>脚あげて  
<sup>うすば</sup>薄翅かけろう飛ぶばかり。

ちょうど母さん、この庭で  
いつかこうしてましたね。

ちょうどこうして、腰かけて、  
あ、おんなじだ、この話。

金のランプをとりに行た、  
ほら、アラジンのこの話。

<sup>ひき</sup>藁が<sup>な</sup>啼いている。ある晩も  
草がちらちら光ってた<sup>8)</sup>。

七五調である。しかし、あまりこうした調子が気にならないのは口語調だからであろう。第一連では月と朴葉とのタテの空間的距離がある。それに対し、第二連はヨコの空間に飛ぶ薄翅かげろうである。第三連で「母さん……こうしてましたね。」は、どうしていたのかわからない。その解答は次の第四連で「この話」と疑問にしておいて、第五連で「金のランプをとりに行た……アラジン」とその解答を与えている。疑問にしておいては、解答を次に与えるという、巧妙な歌い方をしていることがわかる。最後の第六連では、話を聞いている子供にうたえかけている聴覚と視点について表現している。「藁」の声が聴覚であり、「草」の光りが視覚である。それは子供にとって、とりわけ不気味な雰囲気といえよう。白秋の想像力はまことに豊かであって、母と子との対話の幸福なひとときを彷彿とさせる。

月と胡桃

月のひかりが窓に来て、  
町のひびきをつたえます。

僕は胡桃をコツコツと、  
小さい木槌でたたきます。

胡桃の花は青いんだ、  
ね、そうですね、お母さん。

僕知ってるよ、函館の  
図書館の前にあったでしょ。

石川啄木って、父さんが  
お友だちだといいました。

え、死んだって、小母さんも  
家にお写真ありますか。

あ、お母さん、煙突に月の光が照ってます<sup>9)</sup>。第一連は広い空間を歌っている。次に、木槌を使ってクルミを打つ、その手もとを表現している。「胡桃の花は青い」ことを、母にも認めさせようとしている。第四連で不意に函館の図書館がでてくる。この子供は以前、函館に住んだことがあるのであろう。そして、父から石川啄木とは友だちだったと聞いたことがある。そして、啄木の妻も結核で死んだと聞いて、「え、死んだって小母さんも」という表現になったのである。最後の第七連の「煙突に月の光が照ってます」は、何か唐突の威がする。子供にはこう

した不意に視点が変ってしまうことがある。しかし、煙突のあることで、この子供の住居は街なかにあることを示している。「ね、そうですね、お母さん」と、何かをしながらも、母への同意を求めている。また、煙突に月光がさすのも、母に確認させようとしているのである。

アメフリ アアな [みちち] コホ ,ア]返り舞うてマて ,]返り舞うてマて  
アメアメ フレフレ, カアサンガ, .るさ  
ジャンメデ オムカイ, ウレシイナ。 Pitch pitch, Chap chap,  
ピッチピッチ チャップ チャップ Ran ran ran,  
ランランラン。

カケマシヨ, カバンヲ, カアサンノ 雨干おくまぐまぐせ ,ア]ち .るはは思は次音>  
アトカラ ユコユコ, カネガナル。 音入る [へくサマセ ,マへハセ ,おまアマカ]  
ピッチピッチ チャップ チャップ アのるりア]響きコハク ,のるな [ホセ] の  
ランランラン。 .るさあのるりア]響きりつらや .るさあ更奏は静感おのりつら  
アラアラ アノコハ ズブヌレダ, マてマて] ,たま .るはち目出なるこさるりア]さ  
ヤナギノ ネカタデ ナイテイル。 .る

ピッチピッチ チャップ チャップ 舞はマアミカ マへマヤ ,くサマセ] お返四舞  
ランランラン。 舞すおりなるとおとこす舞を乗はコ舞ス ,ウのウ]舞を乗の自分コ  
カアサン ボクノヲ カシマシヨカ。 .るさあのるりなれさみ舞う [サロくマミカ (コ  
キミキミ コノカサ サシタマエ。

ピッチピッチ チャップ チャップ 舞お舞の舞回 8  
ランランラン。 舞は舞舞 ,りつらさあま舞舞 ,りち舞舞 ,アハまま主り舞舞お舞干  
ボクナラ イインダ カアサンノ .るさあれおののな舞舞を舞幸よ舞の舞人おれこ  
オオキナ ジャンメニ ハイッテク。 舞りし舞 ,るさあコくふるさア]でなちこく走  
ピッチピッチ チャップ チャップ .るさあのる舞コさよの舞コつす ,たまよアハ舞

源流のランランラン<sup>10)</sup>。こるるの突撃、「カ」こるるは「こま」アと響け及脚コ意不ス」  
「よるる」まや脚、「さ」【まよるは「はまやま」は】。るの「ア」示さるこるるのやまの  
の「アメフリ」はカタカナで書かれている。この方が雨の一粒一粒を連想するからであろ  
うか。今は「蛇の目」の傘などさす人はいない、洋傘である。いや、母親は子供をクルマ  
で迎えにくるかも知れない。

アメアメと繰り返し、フレフレと繰り返して、次に「母さん」がでてくる。母といっ  
しょであることに心がはずんでいるのである。そのため、うとうしい雨も楽しいことにな  
る。

Pitch pitch, Chap chap,

Ran ran ran,

ピッチピッチは蛇の目にかかる雨の音であろう。チャップチャップは長靴で水溜りを歩  
く音だと思われる。そして、ランランランは子供のはずむ心を示しているようである。

「カケマシヨ、カバンヲ、カアサンノ」とKA音で頭韻をふんでいる。そのKA音はのち  
の「カネ」がなるの、KAにも響いているのである。また、カネの鳴る音が「ユコユコ」  
というのは独特な表現である。ゆったりと鳴っているのであろう。

「ヤナギノ ネカタデ ナイテイル」はナ、ネ、ナとN音が繰り返えされて、リズムを  
なしているところが注目される。また、「アラアラ、アノコハ」では、A音が三回でてく  
る。

第四連は「カアサン、ボクノヲ カシマシヨカ」とある。以前、学生のレポートに、母  
に自分の傘を借したので、友達には傘を借すことはできないはずだ、というものがあつた。  
「カアサン」あなたに僕のを借しましよか、と解釈したのであろう。「ボクノヲ（あの子  
に）カシマシヨカ」と読みとれないのである。

### 3 回想の母性愛

子供は母親より生まれて、抱擁され、母乳をもらったり、愛撫されたりする。あるいは  
母の両腕のなかで揺られたりして、育っていく。その間に、いく度も安らかな眠りにつく。  
これは人間の最も幸福な時期なのかも知れない。

歩くことが少しできるようになると、母より離れていく練習をすることになる。母から  
離れてもまた、すぐに母のもとに戻るのであるが――。



さらに、母のまわりにいつもいて、母のなすことを模倣するようになる。この同行の頃が、かたわらからみていると、ほほ笑ましいものである。実際、母親からしてみれば思わしく大変なこともあるであろう。母が掃除をすれば、自分もしようとするし、母が靴を磨けば、自分も靴墨に手をかける。母がごろんとすれば、自分もごろんとする、といったふうである。

しかし、生長するということは母と離れて独立することでもあり、いつか母は回想の主人公となっていく。

この道

この道はいつか来た道、  
ああ、そうだよ、  
あかしやの花が咲いてる。

あの丘はいつか見た丘、  
ああ、そうだよ、  
ほら、白い時計台だよ。

この道はいつか来た道、  
ああ、そうだよ、  
お母さまと馬車で行ったよ。

あの雲はいつか見た雲、  
ああ、そうだよ、  
山査子の枝も垂れてる<sup>11)</sup>。

人生を旅行にたとえる人もある。生より死への時間の街道を歩いていく。ある時はゆっくり、ある時は走っていく、もちろん転んでしまうときもある。現実の旅行では、戻ることもできる。また、一度行った道を再度歩くこともできる。しかし、人生の時間はあと戻りはできない。

ここはふるさとに帰ってきたというよりは一度住んだことがあるとか、一度旅行したことのある土地にきたのであろう。戦争の時代がすぎて、また、戦争が始まろうとする時に「この道はいつか来た道」などという言葉が人々の間にはやったりしたものである。この白秋の詩句から、ヒントを得ていたのであろうか。

この童謡は第一連で「あかしや」が咲いているので、北国を想わせる。「白い時計台」で、札幌などを思い浮かべる。今は馬車でいく時代ではない、クルマで通りすぎてしまう。だから、ものをじっくりと見ている暇はない。「山査子の枝も垂れてる」など見つめていることはできにくい。

しかし、今の時代は、今の時代でそれぞれ違った方法で、ゆったりとした同行はできないにしても、いっしょにジェットコースターなどに乗ったりして、現代なりの母との同行もあることは事実である。

### 月夜の家

こわ  
壊れたピアノに  
壊れ椅子、  
だれ  
誰が月夜に弾いててか、  
誰もいもせず、音ばかり。

しろ むくげ  
白い木櫃に  
あおがらす  
青硝子、  
母様もしかと来て見ても、  
中には月のかけばかり。

ときどきひか  
光る  
眼が二つ、  
くろ めねこ  
黒い女猫の眼の玉か、  
それともピアノの金の錠。  
壊れピアノに

壊れ椅子，  
誰が弾くやら，泣くのやら，  
部屋には月のかげばかり。

空には七色  
月の暈，

いつまで照るやら，照らぬやら，  
壊れたピアノの音ばかり<sup>12)</sup>。

この「月夜の家」には、原色がいくつかでてくる。そうした意味では、これは白秋らしい詩である。

- 白い木槿 (白)
- 青硝子 (青)
- 黒い女猫 (黒)
- 金の鋏 (金)

白秋童謡で有名なものでは「赤い鳥，小鳥」で，赤，白，青の小鳥がでてくる。また，名作「からたちの花」では，青，白，金がでてくる（トゲ，花，実）。このように元来，白秋は原色が好きである。ここでも白，青，黒，金と原色が四つもでてきているのである。

また，壊れたピアノ，壊れ椅子というところに，柳河は「灰色の柩」であるとか，「廢れたる園にふみ入り……」と歌った表現と似て，退廢的ムードがある。

また，「黒い女猫の眼の玉か」といったところに，ミステリアスなものがでている。彼の第二詩集「思ひ出」のなかにも，こうしたミステリアスな，幼年時代の体験の詩がいくつもある。その一例を，次に挙げてみることにする。

昨日うまれたあかんぼを，  
その眼を，指を，ちんぼこを，  
真夏真昼の醜さに  
憎さも憎く腕む時。

何かうしろに来る音に

はっと恐れてわななきぬ。

「そのあかんぼを食べたし。」と

黒い女猫がそっと寄る。

〈あかんぼ〉<sup>13)</sup>

「月夜の家」にも黒い女猫がでてくるが、この「あかんぼ」の詩にもやはり黒い猫がでてくるのである。

さて、それはともかく「月夜の家」では、第一連で「誰もいもせず音ばかり」、第四連で「誰が弾くやら、泣くのやら」、第五連で「壊れたピアノの音ばかり」、こうした表現をみると、ミステリー小説を読んでいる雰囲気となってくる。

「月の暈、いつまで照るやら照らぬやら」で、やはりほんやりした暈が気になってしまふのである。「七色の暈」を示しているが、これはほんやりしているもので、原色ではない。

里ごころ

笛や太鼓に

さそわれて、

山の祭に来て見たが。

里恋し、

風吹きや木の葉の音ばかり。

母さま恋しと

泣いたれば、

どうでもねんねよ、お泊りよ。

しくしく、お背戸に

出て見れば、

空には寒い茜雲。

雁，雁，棹になれ。

前になれ。

お迎いたのむと言うておくれ<sup>14)</sup>。

白秋は熊本南関外目の母方の祖父の家で生まれたようであるから、次男の鉄男、三男の義男の生まれる時は、この祖父の家にあずけられたとみられる。この「里ごころ」の詩は、今からみると、古い田舎のムード、レトロ調の味わいがある。七五調である。「母さま恋しと泣いたれば」とある。ここでは母と離れたため、初めて泣いたのであろう。幼稚園児あたりは、母にとり残されるくやしさを、淋しきで、泣く子が何人かいる。やがては、母より友人の方が面白くなって児童期に入っていくのであるが――。

色彩的には「寒い茜雲」があるばかりである。「雁，雁，棹になれ」むかしの子供はこういうことを言って育ったが、現代っ子はジェット機とかミサイルのようなもの（あるいはUFOなど）にしか、反応できないのではなかろうか。バック・グラウンド・ミュージックは、笛や太鼓であると同時に、「木の葉の音」、そして「泣き声」である。なお、お迎えは（幼い隆吉の場合）人力車であった。

### 山のあなたを

山のあなたを

見わたせば、

あの山恋し、

里こいし。

山のあなたの

青空よ、

どうして入日が

遠ござる。

山のあなたの

ふるさとよ、

あの空恋し、

母こいし<sup>15)</sup>。

北原白秋編「日本伝承童謡集成」では、その第一巻が「子守唄」である<sup>16)</sup>。ここに挙げた「山のあなたを」も七五調で、単純なものであるがいわゆる子守唄調である。他家に子守娘として出されて、遠い里の母を思っているようである。

そうした年長の少女ではないとすると、作者はこの歌の主人公を何歳ぐらいに考えていたのであろうか。「どうして入日が遠ござる」のこうした表現をみても、少なくとも小学生以上ではないかと思えるのである。「山のあなたの空遠く、幸い住むと人のいう…」このカールブッセの詩を思いだす。白秋も無意識の底に、そうした心理が流れていたのであらうか。

ここでは色彩効果というものは、ほとんど使用していない。強いて言えば「青空」「入日」ぐらいのものである。白秋にしてはめずらしい。

最後に「あの空恋し、母恋し」で結んでいる。母のいるふるさとが恋しい、そして、母が恋しい、ということになる。年令がすすんでいけば、母に代って恋人が対象となっていく。しかし、ここではまだ母が恋人であると言ってよい。

きじ  
雉子ぐるま

きいじ きいじ きじ  
雉，雉，雉ぐるま。

お雉の背中に積むものは、

子雉，子々雉，孫の雉。

雉，雉，雉ぐるま。

お雉のくるまを曳くものは、

子鳩，子々鳩，孫の鳩。

雉，雉，雉ぐるま。

雉は子の雉，父恋し。

鳩は子の鳩，母恋し。

雉，雉，雉ぐるま。

雉はけんけん，鳩ぼっぼ，

啼いてお山を今朝越えた<sup>17)</sup>。

「子雉，子々雉，雉ぐるま」とあるが，子々雉は孫であるから，次にでてくる「孫の雉」というのは，子々雉と同じことになる。それ故，実質上，二回孫を繰り返しているわけで，孫雉のところは，理屈からいえば曾孫雉である。

あるいは「子々雉」を子供の複数として，解決すれば「孫の雉」の表現はそれでよいことになる（鳩についても同様である）。

雉ぐるまは玩具であるから，父を恋することもない。鳩も母を恋いすることもないのだけれど，そこは擬人化をもって，感情移入して，「雉は子の雉，父恋し」「鳩は子の鳩，母恋し」としたのであろう。

最後に「啼いてお山を今朝越えた」とあるので，今日の夕方までには，父や母に会えることを想像してもよさそうである。

さて，理屈を言えば，孫雉と孫鳩は曾父母を恋しいといわないのか，と疑問が浮かんでくる。きっと，この雉や鳩は曾父母のところにいるのであろう。そして，父母のもとを恋しく思い，今日はふるさとの父母の家に帰っていくのであろうか。

ちんちん千鳥

ちんちん千鳥の啼く夜さは，

啼く夜さは，

硝子戸しめてもまだ寒い，

まだ寒い。

ちんちん千鳥の啼く声は，

啼く声は，

あかり  
燈を消してもまだ消えぬ、  
まだ消えぬ。

ちんちん千鳥は親ないか、  
親ないか、  
夜風に吹かれて川の上、  
川の上。

ちんちん千鳥よ、お寝らぬか、  
お寝らぬか、  
夜明の明星が早や白む、  
早や白む<sup>18)</sup>。

千鳥に寄せたこの詩は、父母と離れてしまった子である。だから、父母を恋するよりは千鳥の啼き声を聞いて、あの千鳥は親のない千鳥ではなかろうか、と自己の淋しさを感情移入している。

ちんちん千鳥の (8)

啼く夜さは (5)

啼く夜さは (5)

硝子戸しめても (8)

まだ寒い (5)

まだ寒い (5)

8 5 5, 8 5 5の調子であることがわかる。根本的には「七五調」が骨格で、それをくずして(童謡のときにはよくある)八五としたのであり、それに5を加えたとみればよい。

第一連で、yosawaの「sa」音が、まだ寒い(samui)「sa」音と響きあって快よい。第二連のnakuyosawaのk音が、まだ消えぬ(kienu)のk音と響きあっている。第四連は、千鳥に寄せる作者の愛情がにじみでている。冬の夜の澄明な空間とそして、子供心の極まった淋しさというものがよく表現されている。



ここでは白秋童謡のなかで、とくに子供と母との関係あるものを取り上げてみた。与田準一編「からたちの花」の童謡集200の作品のなかにはここに取り上げた14の作品が何らかの意味で母とかかわりのあるものであった。それ故、パーセンテージから言えば7%ということになる。母についての童謡はそれほど多いわけではない。(父についての童謡はもっと少ない。)

なお、14の作品の母に関する童謡のうち最も若い(嬰兒)ものを拾ってみると、四つあった。すなわち、「揺籃のうた」「南の風の」「こぬか雨」「ねんねのお国」である。

さらに、すすんだ段階(幼児-児童)を示したものに「仔馬の道ぐさ」「月夜り庭」「月と胡桃」「アメフリ」の四つがある。

最後は母から離れていった段階のものとなる。すなわち「この道」「月夜の家」「里ごころ」「山のあなたを」「雉ぐるま」「ちんちん千鳥」の六作品である。

それらを各章の見出し「抱擁の母性愛」「同行の母性愛」「回想の母性愛」としてまとめた。

第1章の「抱擁の母性愛」においては、やはり、代表的なものは、“揺籃のうた”である。この童謡は山田耕筰の名曲のもとよく歌われたものである。母性愛がにじみでていると同時に、嬰兒の夢みるような幸福さがしのばれるものである。

第2章の「同行の母性愛」においては、とくに“アメフリ”が母といっしょであることに、いかに子供が喜んでいるか、その嬉しさの感情がよく示されている。「ピッチピッチ、チャップチャップ、ランランラン」のはずむ音は実に魅力的である、と同時に母といっしょであることの児童の生の充実した時、言い知れぬ満足感をもっていることがわかる。

第3章の「回想の母性愛」としては“この道”がわかりやすいものである。しかし、その愛の裏がえしとして、両親の愛の欠除している千鳥のことを同情して歌っている「ちんちん千鳥」もとりわけ印象的である。両親が健康で生存している子供と、両親がいない子供では、その生育上の心理に、いかに影響が大きいかは、この白秋の童謡をみても想像できるというものである。

北原白秋は明治18年の生まれであった。そのため、昭和60年に「北原白秋百年祭」が九州柳川でおこなわれた。その際の記念講演はフランスのソルボンヌ大学の大学院に籍をおく女性、ドミニック・パルメさんであった。彼女は「白秋の童謡」について講演をした。<sup>19)</sup>

当時、このテーマで博士論文を執筆中ということであった。私は拙著「北原白秋論」を女史にあげて、感謝をされた記憶がある。そうした意味では、白秋の童謡は日本だけのものではなく、ここに歌われた童謡は国際的に幅広く、理解されているものであることがわかる。日本人の美しい、優しい心情が外国人にも受け入れられて、極東の島国の日本人というものが単に軍国主義であったり、経済主義の人間ばかりではないということが認められて、歓迎されているようである。すなわち、日本の芸術や文学にも人間らしい深みのあるところが、認められて来たように思われる<sup>20)</sup>。

注

- 1) 富田博之編「大正自由教育の光芒」, 久山社, 1993
- 2) 笹本正樹「北原白秋論」, 五月書房, 1975
- 3) 与田準一編「からたちの花」(北原白秋童謡集), 新潮社, 1957, 41-42頁
- 4) 同上 41頁
- 5) 同上 40-41頁
- 6) 同上 39頁
- 7) 同上 29頁
- 8) 同上 128-129頁
- 9) 同上 128頁
- 10) 同上 183-184頁
- 11) 同上 168頁
- 12) 同上 31-32頁
- 13) 木俣修他編「白秋全集」(第2巻), 岩波書店, 1985, 151頁
- 14) 与田準一編「からたちの花」(北原白秋童謡集) 新潮社 1957 34頁
- 15) 同上 22頁
- 16) 北原白秋編「日本伝承童謡集成」(第一巻 子守唄) 国民図書刊行会 1947
- 17) 与田準一編「からたちの花」・22-23頁
- 18) 同上 35頁
- 19) 清水乙女編「たかむら」 篋短歌会 1985 (5月号) 52頁
- 20) 笹本正樹「北原白秋の詩的想像力とその深層心理」(筑波大学, 「教育方法学研究」第10集) 1991 1-14頁



吉川 淑人 著 吉川 淑人 著

平野 幸三 著 平野 幸三 著

高松大学 高松大学

高松大学 高松大学

## 高松大学紀要

第 27 号

平成9年3月20日 印刷  
平成9年3月20日 発行

編集発行 高松大学  
高松短期大学  
〒761-01 高松市春日町960番地  
TEL (0878) 41-3255  
FAX (0878) 41-3064

印刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町1-8-10  
TEL (0878) 33-5811